

ついに語られる!アドルフ・ヒトラーという独裁者を誕生させた、
画家を目指した青年時代の孤独と挫折。

1918年ドイツのミュンヘン。

第一次大戦後の混乱と、未来への希望が満ち溢れる街で、大戦で片腕を失い画商として新しい人生を踏み出したばかりの
マックス・ロスマン(ジョン・キューザック)と、画家志望の平凡な青年、アドルフ・ヒトラー(ノア・テイラー)は出会った。アド
ルフの心の中に秘めた孤独や怒り、そのすべてを絵画へ傾けるように示唆するマックス。

しかし、芸術への情熱で結びついた友情は、次第に皮肉な運命をたぐり寄せてゆく…。

映画『アドルフの画集』に寄せられた感想です。

黒田征太郎さん(イラストレーター)

ヒトが生まれて死んでゆく。そのことが一枚の絵だということが確認できました。「オモシロカッタ」

ジミー大西さん(アーティスト)

僕は思いました。一枚の絵を描くのは、追い込まれ、楽しみ、人と出会い、色んな角度で物を見ることだと。

小堺一機さん(タレント)

この映画を単に“ヒトラー”の話としてだけ見ないで欲しい。

これは誰にでもある若い自分探しの旅の映画です。

南美希子さん(キャスター・エッセイスト)

芸術への傾倒から、政治への陶酔へ。彼の心の軌跡は観る者の魂を激しく揺さぶる。

光と影、綾をなすような二人の男の友情が巡り着いた衝撃の結末に胸を突かれる思いがした。

小山登美夫さん(ギャラリスト)

マックスもヒトラーも、絵画のもつ魔力と人間の矛盾した欲望に翻弄される。才能とは一体何なのだろう。

ハリウッドを代表する俳優、ジョン・キューザックが惚れ込んだ作品

ジョン・キューザックは「アドルフの画集」の脚本を、それまでに会った最高の傑作だと感じ、ユダヤ人画商のマックス・ロ
スマンという難しい役柄での出演を決めた。大戦後の時代の狂気を体現しようと試みた芸術家など、実在の人物を融合し
て登場した架空の存在であるマックスとの対比により、アドルフが抱いていた孤独や焦りが観る者の心を激しく揺さぶる…

アドルフの画集

五十嵐太郎さん(建築批評家)

芸術も戦争だ。この映画の中でモダニズムの空間に住み、前衛的な絵を売りさばく、
ユダヤ人画商を震撼させたもの。それは絶望の淵で、ヒトラーが描いた未来都市のスケッチだった。

城戸真亜子さん(画家)

孤独の淵から自分の魂を救いだしてくれるのは芸術なのか政治なのか、
30歳のアドルフの焦りと不安が痛い程理解できる。

松尾スズキさん(作家・演出家・俳優)

お宝映像満載!あのヒトラーがあんなことやこんなことまで!

おちまさとさん(プロデューサー)

『インディ・ジョーンズ』の脚本家が撮りたかった映画は運命に翻弄されるリアルな人間ドラマだった。
その監督の振り幅と懐の深さが滲み出る。

細野不二彦さん(漫画家/「ギャラリーフェイク(小学館ビッグコミックスピリッツ)」)

売れない。金ない。女にモテない。下積み時代のヒトラーを、この映画で初めて知る人もいるはずだ。
人間は変わりうる。これは、“メイキング オブ ヒトラー”である。

